

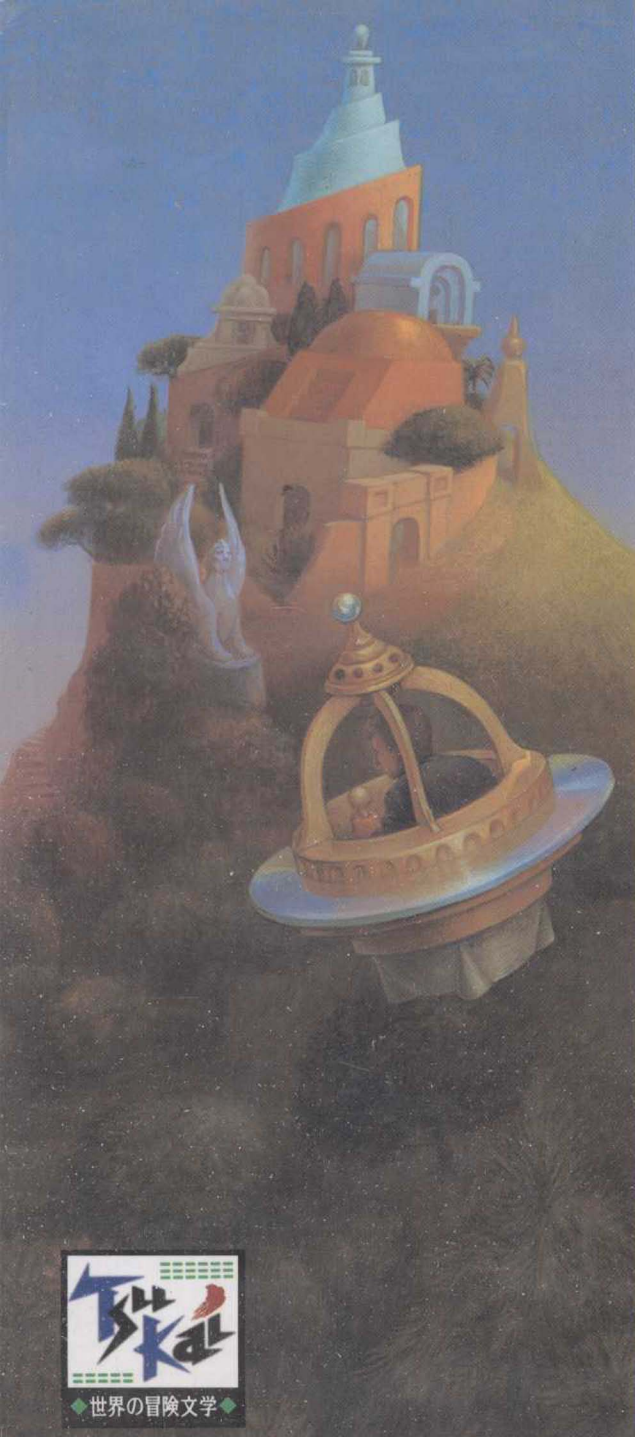
タイムマシン

眉村 卓

●文

原作●H・G・ウェルズ

絵●上田 朱



◆世界の冒険文学◆

蘇工業学院図書館蔵書



◆世界の冒険文学◆

KODANSHA

眉村 卓・文

原作・H・G・ウェルス

絵・上田 朱

まゆ むら たく
眉村 卓 原作 ハーバート・ジョージ・ウェルズ 953

痛快 世界の冒険文学 ②

タイムマシン

たいむましん 20cm 294 P

定価は、カバーに表示してあります。

1997年11月20日 第1刷発行

筆 者 眉村 卓
画 家 上田 朱
発行者 野間佐和子
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21(〒112-01)
電話 出版部 03(5395)3535
販売部 03(5395)3625
製作部 03(5395)3615
印刷所 図書印刷株式会社
製本所 黒柳製本株式会社

© Taku Mayumura 1997 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書出版部あてにお願いいたします。

〔R〕日本複写権センター委託出版物本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-268002-5 (児図)

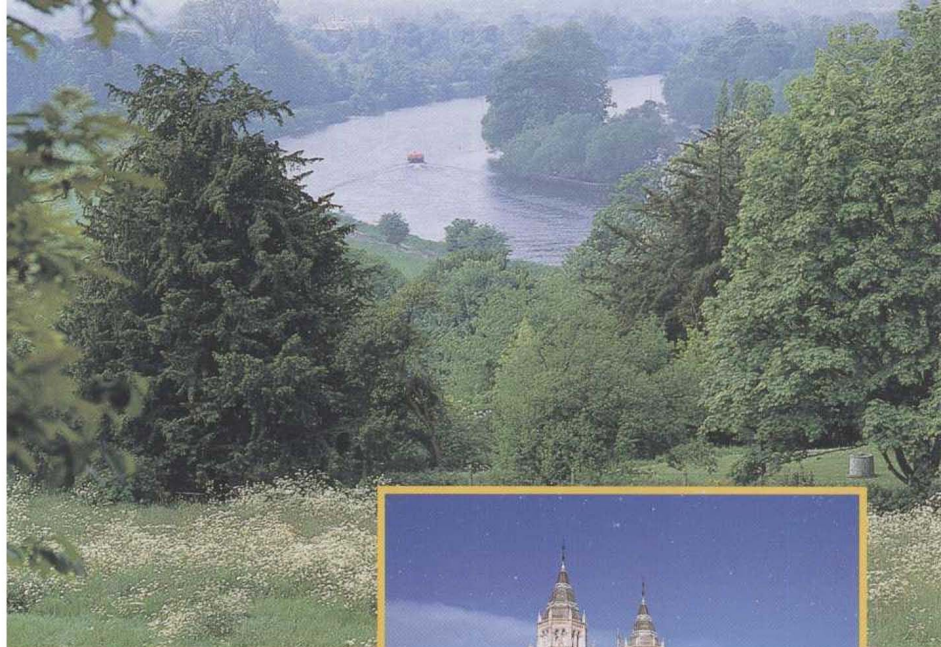


1997.9 AKE.U

じかんりよう
時間旅行における奇妙な感じを、
ことばにするのはむずかしい。そ
れはひどくいやなものだ。ローラー
コースターに乗って、ぜんそく
らつっこんでいく感覚——とても
いえないのだろうか。

ほんめん
(本文六〇ページより)

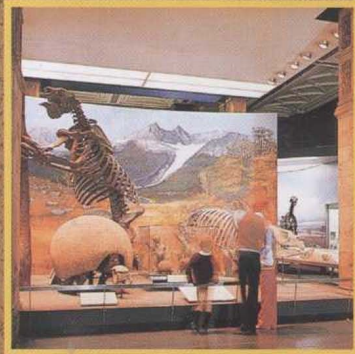
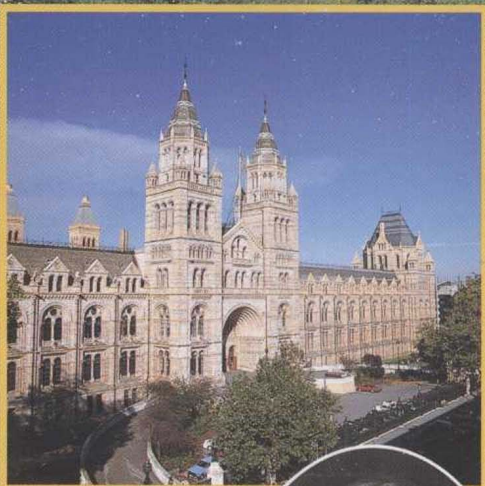




▲リッチモンドの丘から見た、
現在のテムズ川流域の風景。

▶サウス・ケンジントンにある、
現在の大英博物館（自然
歴史博物館）の建物。

▼同館内部の展示。右手前が
メガテリウムの骨格標本。



58歳当時の
ウェルズ。



タイムマシン

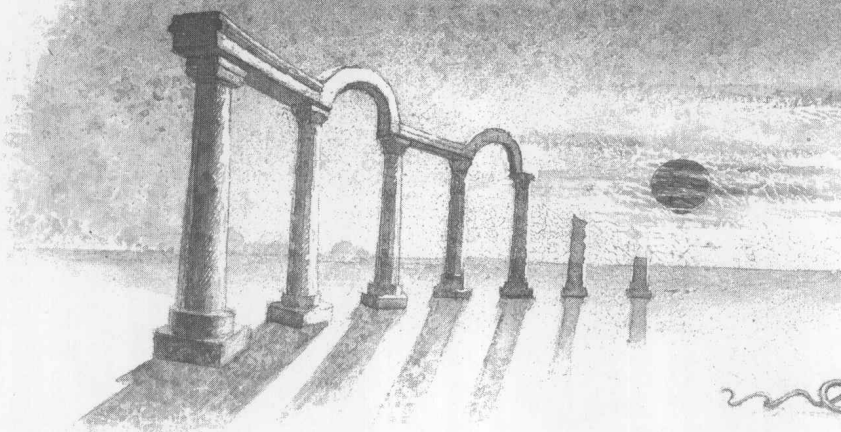
たいむましん

もくじ

目次



5	4	3	2	1	
マシンが消えた	小さな未来人たち	未来世界へ	タイムトラベラーの帰還	ある夜の実験	はじめに
.....					
101	73	56	37	7	5



6 ウィーナ 123

7 モーロック 142

8 青磁宮殿へ
せいじ きゆうでん 172

9 冒険の果て
ぼうけん は 211

10 タイムトラベラーはどこへ? 252

むすび 269

痛快三百科
つうかい ひやっか 272

解説とあとがき
かいせつ 278

絵●上田 朱
装丁●桜庭文一

はじめに

この話は、あと数年で二十世紀になろうとする時代の、とある夜にはじまる。
お読みになって、とても信じられないとおっしゃるかもしれないが、私はありのままをしるしたのである。

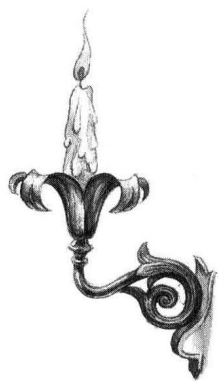
あらかじめ申しあげておくけれども、この話のはじめのほう、つまり、タイムトラベラーが、「次元」とか「時間航行」とかについて語るくだりは、かなりややこしい。読者のなかに、うるさいりくつはきらいだという人もいるだろう。そんな方は、まず、タイムトラベラーがふしぎな冒険談をはじめめるあたり（つまり、第三章あたり）から、お読みになればいい。そのあとで気がむけば、はじめにもどってほしいのだ。ややこしいのだが、ここはやっぱりだいな部分だし、それに、読んでみると、こういうところにはそれなりのおもしろさがある——ということになるのではないか、とも思うからである。

ところで、私はあえて、ここでは、その男、つまり、この物語の主要な人物である男を、本名ではなく、タイムトラベラーとよぶことにする。

さて。

そのころ私は、ロンドン郊外のリッチモンドにあるタイムトラベラーの邸宅を、毎週のようになぞねていた。(イギリスのむかしからのならわしで)男ばかりが集まって、議論をしたり知的な会話を楽しんだりする場所はすくなくないが、タイムトラベラーの邸宅でのそれは、いっふう変わった刺激的なものとされていて、私にもなかなか有益だったのだ。

会合は、毎週木曜日の夜であった。



その晩、タイムトラベラーは、私たちを前にして、えらくむずかしい議論をはじめていた。これまでも、彼の議論が常識的なものであったことなど、一度もないのだが、その晩はとりわけ常識をこえていたのである。

熱心に語っているせいで、彼の灰色の目はきらきらとかがやき、いつもは青白いといっている顔も、その夜は赤みをおびていた。

暖炉の火は、気持ちよく燃えていた。ゆりの花のかたちの燭台が、私たちのグラスをやわらかく照らしていた。

私たちがすわっていたいすは、彼が考えて作らせたもので、腰をおろす人間をふわりとつみこむようにできていた。

食事のあとだった。

そのせいで、私たちは、ゆったりした気分になつていた。べつのいい方をすれば、少々みょうな意見を聞かされても、あまり気にならない状態にあつたのだ。

タイムトラベラーは、ときどき、ここが重要というところにくると、すらりとした指を立てて動かしながら、しゃべっていた。

「さあ、注意して聞いてくれよ。これからぼくは、きみたちの常識に挑戦するつもりなんだからね。いいかい？ たえば数学の——幾何学だ。きみたちが学校で習った幾何学は、限界だらけの不十分なものといわなければならぬ。」

「これはまた、真つ正面からけちをつけたものだな。」

赤毛のフィルビーという男がいった。フィルビーは、議論大好き人間なのだ。

「説明するよ。」

タイムトラベラーは、フィルビーにうなずいてみせてから、つづけた。

「ぼくらが学校で習った数学では、線は太さが無いものとする——となっていた。そうだろう？ しかしじつさいには、そんな線は存在しない。その意味では、教科書にあつた『数学的平面』もおなじだ。『太さのない線』でできた『厚みのない面』なんて、じつさいにあるのではなく、頭のなかにあるだけだろう？」

「そのとおりだ。」

あいづちをうったのは、心理学者である。

「いいかえれば、点にしる線にしる面にしる、ものごとのあるひとつの性質をぬきだした——抽象的概念だということになる。そういう意味では、立体のたてとか横とか高さとかいうものも、それぞれ長さをあらわすだけにすぎない。立体のぜんぶをあらわしているわけじゃないんだ。となれば、たて・横・高さしかもたない立体というものも、じつさいにはありえないわけだろうか？」

タイムトラベラーは、いうのである。

フィルビーが、さえぎろうとした。

「ちよつと待つてくれ。それはおかしい。立体はじつさいにあるんだ。その立体はたて・横・高さで——。」

タイムトラベラーは、皮肉っぽい表情になった。

「もちろん常識としては、きみのいうとおりさ。ぼくはその一般常識なるものが、じつはどのくらいあやふやなものかを、考えてもらいたかっただけだ。そこでつぎの、本論にかかわる問題にうつろう。きみは、瞬間的な立体というものがあると思うか？」

フィルビーは、きよとんとなった。

「どういうことだ？」

「つまりさ、瞬間的な立体、ぱつとあらわれてすぐ消えてしまう立体というものがあるか、ということだ。」

フィルビーは、うーんとうなりながら考えこんでしまった。

タイムトラベラーは、微笑してつづける。

「そういうものかもしれないとしても、実在するとはいえないだろう？　すくなくとも存在するということからは、何時間か、何分間か、いや何秒間かでも、とにかくある程度の時間、そこになければならないんだ。」

「……………」

「だから実在する物体は、すべて四つの方向に——いわばひろがりをもっているわけだ。たとえ横と、高さ、そして持続時間の四つをね。ここまでは、いいかい？」

「……………」

みんな、聞いていた。

タイムトラベラーは、説明を再開した。

「その四つについて……ぼくははじめの三つを空間の次元、四つめを時間の次元とよんでいるけれども、もともとこの四つには、ちがいはないんだ。同類で、同質なんだよ。」

なのに、時間という四つめの次元がはじめの三つとちがうように思えるのは、ぼくたち人間にとって、時間が特別なものだからだ。ぼくたちの意識というのは、生まれてから死ぬまで、時間のなかを一定方向にうつっていくだけなんだからね。それも、ねむっているときのことまで考えると、とぎれとぎれに一定方向に移動しているということになる。」

「それは……たしかに、そういえますね。」

みんなのなかではいちばんわかい男が、消えてしまった葉巻の火を、ランプのほのおでつけないおそうと悪戦苦闘しながら、声をだした。

「そうなんだよ。でも、どういうわけか、このことは、一般的には知られているとはいえない。ぼくにいわせれば、ふしぎなことだ。」

タイムトラベラーは、不満げにいい、それからいくらか陽気な口調になった。

「ま、ようするに第四の次元とは、そういうことだ。時間というものを、べつの見方で表現しただけの話でね。くりかえすが、たて・横・高さの空間の三つの次元と、この四つめの時間の次元には、なんのちがいもない。ぼくたちの意識が、時間に沿ってうつっていく——というこ